

編集作業軽減のための取り組み

DTPの制作効率は工夫次第で大きく向上できます。
当社のアイデアにより、お客様の編集作業負担やミス発生が減り、
また、コストダウンが実現できた事例をご紹介します。

出版物は商品ごとにデザインや判型、ページ数、色数等が異なり、一点一点がオーダーメイドです。出版物のデータを作るDTP制作もライン化はできません。

それでも当社では、依頼いただいた全ての仕事において自動組版やデータ加工、アプリの組み合わせ等、さまざまなアイデアでDTP作業の効率化、省力化を図っており、その成果はコストダウンという形でお客様へ還元されています。

また同時に、お客様側の原稿作成や校正といった編集業務についても、その作業負担を軽くするための提案を行っています。今回紹介するのは、当社の提案により実際にコストダウンや効率化につながった事例です。

■索引の作成・校正業務の効率化

実用書籍の多くに索引ページがありますが、索引は本文が校了に近づいてから着手されるため、原稿作成、校正確認の時間を十分に取れない場合があります。とは言え、ページ数が多い商品などではノンブルと語句の付け合わせに大きな労力が必要です。

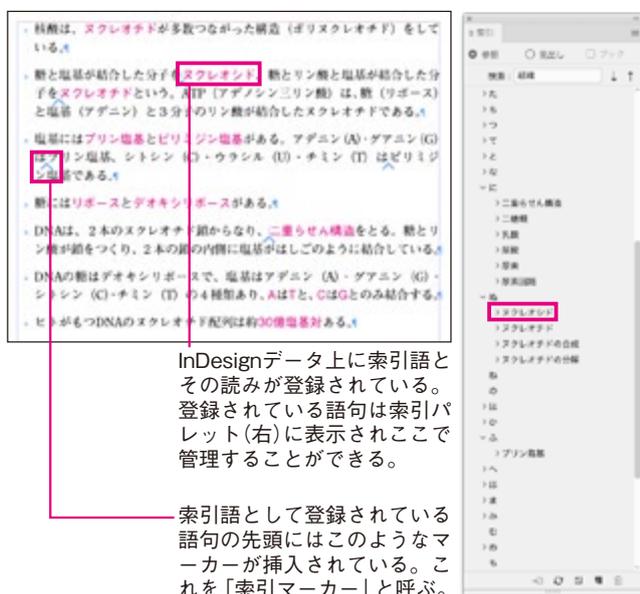
当社で毎年受注している商品に、総ページ数1400、

うち索引が40ページにおよぶ看護師国家試験の参考書があり、お客様は上述のような進行に苦労されていました。そこで、本文にあらかじめ索引情報を埋め込んでおくことを提案しました。

この商品は前年度版をベースに、新規原稿を挿入して作られます。まず、前年度版データの索引語にタグとその語句の読みを埋め込みました。これで索引語の自動抽出が可能となりました。新年度版の作業を行う際は、新規原稿の文章中に索引語が含まれる場合に、挿入する時点で索引語にタグを入れてしまいます。索引は、本文データからテキストを抽出しフォーマットへ流し込むことで完成します。この工程により索引語とノンブルの付け合わせが不要になり、確認の手間が大きく軽減されました。➔MCR29,49

■誌面の特定の部分だけを総ルビに

低学年向け図鑑のルビ入れについて相談をいただきました。著者様が自らInDesignでレイアウト作業を進めており、ルビ入れだけ当社に依頼したいという内容です。ただしこの商品は、主に子どもが読む箇所は総



ルビを入れる箇所と入れない箇所をレイヤーで分けることで、部分的な総ルビ化を労力をかけずに行うことができる。上図ではピンク色のテキストフレームのレイヤーにはルビが入らない。

ルビに、解説やキャプションなど大人が読む箇所はルビを付けないという作りになっています。

当社には自動で漢字にルビを振るツールがあります。しかし、このツールは選択した範囲すべてにルビが振られるため、ルビを付けない部分を指定しなくてはなりません。そこで、著者様がレイアウトしていただく際に、子どもが読む箇所と大人が読む箇所をレイヤーで分けていただきました。当社でレイヤーを選択して総ルビの処理をすることにより、ルビの振り分けができました。お客様側と当社、双方にとって大きな手間の削減となり、結果的にコストダウンにつながりました。→MCR24

■紙原稿へのマーカー指定が不要に

今般のコロナ渦により出版業界でもテレワークが広がっています。在宅作業では、プリンタやスキャナなど十分な設備がなく、これまで紙にプリントして行っていた原稿への赤入れやマーカー指定を行うことが難しい場合があります。

そこで、見出しや強調文字などの指定を紙で行うのではなく、Wordの文字飾り機能を使ってもらうことを提案しました。

Wordには太字や下線、蛍光マーカーなど様々な文字飾りの機能がありますが、デフォルトの機能ではWordの蛍光マーカーや一部の文字飾りをInDesignへ反映させることができません。当社では専用のプログラムを使用することで、Wordのあらゆる文字飾りを



上記がInDesignに取り込む前のWordの状態。太字や斜体などWordの文字飾り機能が使われている。これを専用のプログラムで処理すると下図のようにInDesign上で同じように再現される。

再現させることができます。

また文字飾りをそのまま再現するだけでなく、赤色は大見出し、青色は中見出しといったように、文字色で文字スタイルの指定を行うことも可能です。

この方法で紙のプリントアウトが不要となり、Wordデータだけで原稿と指定が完結します。当社にとっても、Word上の指定を自動的にInDesignデータに取り込むことができるため、品質向上と省力化が期待できます。→MCR28,44

■仕上がり線を自動で付与するプラグイン

出版物の校正を行う際、文字のはみ出しがないか、裁ち落とし部分の塗り足しがあるか、などを確認するために、多くのお客様がトンボに合わせて仕上がり線を手で引いています。しかし、この作業は校正するページ数が増えると大きな負担になってしまうため、「校正紙（プリントまたはPDF）に仕上がり線を入れてほしい」という要望をいただくことがあります。

もちろんInDesignデータ上に仕上がり線を入れることは可能です。しかし、仕上がり線が入っていることはInDesignの作業画面で非常に確認しづらく、校了時に削除することを忘れ、そのまま印刷されてしまうというリスクがあるのです。

当社では、プラグインを用いてプリントやPDFだけに仕上がり線を表示させています。そのため事故を心配することなく、お客様が仕上がり線を手で引く労力を省くことができます。→MCR47,48,53

